

氏名(本籍)	もり 森	べ 部	ゆたか 豊	(愛知県)
学位の種類	博士(文学)			
学位記番号	博乙第2011号			
学位授与年月日	平成16年3月25日			
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当			
審査研究科	人文社会科学研究科			
学位論文題目	唐五代時期の華北における北方系諸族と河北藩鎮			

主査	筑波大学教授	文学博士	片岡一忠
副査	筑波大学教授	博士(文学)	真野俊和
副査	筑波大学助教授	博士(文学)	丸山宏
副査	筑波大学教授	博士(文学)	松本肇

### 論文の内容の要旨

本論文は、唐(618-906)から五代時期(907-959)の中国華北において見られた突厥・契丹・奚・沙陀・ソグド系突厥といった北方系諸族の移動と活動が、当該時期に起きた安史の乱・河朔三鎮の跋扈・五代時期における沙陀系王朝(後唐・後晋・後漢・後周)の成立などと密接な関係を有していたことを明らかにし、「唐宋変革」という中国史上の大規模な社会変動の背景を、北方系諸族の影響を視野に入れて論じた研究である。序論、本論6章、結論から構成されており、史料・文献一覧を付す。

「序論」では、先行研究を整理し、従来の当該時期の政治史研究が中国国内の変化を中心に進められてきたことに対し、本研究は北アジア・東北アジアの情勢を視野にいれ、北方系諸族の動向が当該時期の情勢分析に不可欠であるとする。史料としては近年ようやく公刊された墓誌銘を含む石刻史料を本格的に利用して北方系諸族の具体的諸相を明らかにする。本論文の特徴の一つに、この石刻史料の利用をあげる。

第1章「唐代の河北におけるソグド系住民」では、いわゆる安史の乱の勃発地点となった河北の社会的背景を論じる。具体的には、安禄山が范陽節度使に就任する以前より、河北の幽州や太行山脈東麓を走る駅道沿いの各地にソグド人聚落が存在しており、幽州のソグド人たちの中には、商業活動に従事しているものを数多く確認することができる。当時のユーラシア大陸には、広範囲にわたってソグド商人のネットワークが張り巡らされていたが、その東端に位置するのが幽州であった。ソグド系の安禄山が、ソグド商人の活動していた幽州を本拠地とする范陽節度使に就任したのは偶然かもしれないが、このソグドネットワークを通じて、反乱の経済的基盤を確立したのは偶然ではないとする。

次に第2章「安史の乱前の河北における北方系諸族の分布と安史軍の淵源」では、安史の乱の軍事的基盤となった范陽・平盧両節度使の軍事力の淵源と北方系諸族との関係を論じる。唐代の河北における北方系諸族を羈縻州の分布を通じて見ると、幽州・營州など河北北部に集中していたことが明らかとなる。そのうち、幽州について開元(713-741)から天宝(742-756)時期に唐朝が把握する人口の4割弱が靺鞨・契丹・奚・突厥・ソグドであった。これら4割弱の北方系諸族の多くは幽州城外に各首長に率いられながら部落単位で居住していた。墓誌銘からは、それらの首長の中には折衝府の官に就き、范陽節度使や平盧節度使の軍職にも就いた者がおり、また、羈縻州の中に折衝府が置かれていた事実も確認できる。このことから、河北の羈

糜州住民は、それぞれの首長に率いられ、部落単位で范陽ないし平盧節度使下の軍の一部を構成していたとする。

第3章および第4章では、視点を中国内部へ移し、安史の乱後の河北と唐朝との関係を、山西省と河北省にまたがって存在した藩鎮昭義を通じて再検討する。まず、第3章「安史の乱の終息と昭義の成立」では、藩鎮昭義の成立過程を明らかにする。安史の乱が終息した広徳元年（763）、唐朝は旧安史軍の降将を節度使に任じ、河北全域に置いた。これらの河北藩鎮は、唐朝から半独立的体制をとり続けた。大暦14年（779）の旧安史軍の降将だった相衛節度使の薛嵩の死をきっかけに、唐朝は河北に介入した。と同時に魏博節度使も介入することとなる。唐朝と魏博節度使の緊迫した政治的・軍事的駆け引きの結果、魏博は太行山脈東麓の相州・衛州などを獲得し、一方、唐朝は、河北の磁・？・洛三州を統制下に置くことに成功し、唐朝はこの時点で河北藩鎮に対する楔をうちこむことに一応成功したという。

第4章「昭義を通して見た唐朝と河朔三鎮との関係」では、藩鎮昭義の節度使の出自・昭義で起きた軍乱の性格・唐朝の昭義に対する認識の3点の分析を通じ、従来一貫して対立関係にあったとされる河北藩鎮と唐朝の関係を再検討する。昭義は地理的に唐朝と河北藩鎮の中間に位置し、両者の影響が反映しやすかった。例えば、安史の乱終息後から憲宗の元和年間（805 - 820）の初めまでは、河北藩鎮と唐朝の関係は政治的に対立し、軍事的にも緊張関係にあったが、元和年間以降、河北藩鎮のうち、中核を担う河朔三鎮と唐朝の関係が一種の「共存」状態へ移っていったことを、元和以降の昭義節度使に中央の文人官僚が派遣されていること、昭義で見られた軍乱に河朔三鎮との連動は見られず、むしろ河朔三鎮が唐朝側にたって乱鎮圧に参加している事実から明らかにする。

第5章「ソグド系突厥の河北移住と河北藩鎮」では、安史の乱後の河朔三鎮と北方系諸族との関係を論じる。安史軍を構成した北方系諸族のうち、中核的役割を果たしたのがソグド系突厥である。河朔三鎮が唐朝から半独立割拠していた基盤の一つは、安史の乱前後から憲宗の元和年間（805 - 820）にかけて、河北に移住してきたソグド系突厥出身の武人に求められる。その移住は相当数の集団規模のものであることを墓誌史料によって明らかにする。彼らの河北移住は、安史の乱終息後から憲宗の元和年間における唐朝と河北藩鎮との軍事的緊張関係が影響しており、元和・長慶年間以降、唐朝と河朔三鎮の関係が共存関係に移行すると、河北へ移住する北方系諸族の記録は見えなくなる。代わってこの時期に河北への移動ルートに沿って移住したのが沙陀族であり、この結果、河北藩鎮の勢力は相対的に後退し、朱全忠・沙陀勢力下に組み込まれていったとする。

最後に、第6章「唐末五代の河東におけるソグド系突厥と沙陀」では、唐末に河東北部で勢力を伸張し、五代時期には後唐・後晋・後漢・後周の四王朝を開いた沙陀とソグド系突厥との関係を明らかにする。ソグド系突厥の「六州胡」の代北移動後に同じ地域へ移住したのが沙陀である。黄巢の乱の時に、この沙陀を中心としてソグド系突厥やその他の遊牧系諸族がまとまった。その際に、ソグド系突厥は薩葛（索葛・薛葛）、安慶という部落名で沙陀に従属した。墓誌史料の分析を通じ、五代時期においても代北で部落単位で遊牧生活を送っている集団が存在し、これらの集団は沙陀系王朝の必要に応じ、首長が部落民を率いて各政権に参加していた事実を明らかにした。これが、沙陀系王朝の軍事を支えていたとする。

「結論」では、以上6章の考察結果を踏まえ、唐・五代時期の華北における歴史事象－安史の乱・河朔三鎮の跋扈・沙陀の興起と五代王朝の成立に、北方系諸族の動向が軍事的に大きな役割を演じたことを述べる。そして、「唐宋変革」という時代の変化は、決して中国内部の社会変化だけでなく、北アジア・東北アジア世界の情勢と密接な関係を有していたことを主張する。

## 審査の結果の要旨

本論文は、「唐宋変革」という中国史上の大規模な社会変動の背景を論じる際、従来の研究が中国国内の変化を中心に進められてきたことに対し、北アジア・東北アジアの情勢を視野にいれ、北方系諸族の動向を分析することが不可欠であるとして、唐から五代時期の中国華北において見られた突厥・契丹・奚・沙陀・ソグド系突厥といった北方系諸族の移動と活動を、近年ようやく公刊された墓誌銘を含む石刻史料を本格的に利用して、当該時期に起きた安史の乱・河朔三鎮の跋扈・五代時期における沙陀系王朝（後唐・後晋・後漢・後周）の成立などと関係づけて考察した研究である。

本論文で実証された成果は、従来の編纂史料では解明できないままでいた多くの点に及ぶ。その中で、北方系諸族の河北への移住・居住状況を具体的に提示するとともに、その首長層間の人的関係、当該時期の北方系諸族と藩鎮の関係を、本論文全体を通じて明らかにした点はまず、評価されるべきである。次に安祿山とソグド商人の関係に関して、通説を越えてより具体的な姿を提示し得たことは、単に藩鎮と商人の結びつきを解明しただけでなく、ユーラシアに連なる交易の拡がり、北アジアと中国の交流の一側面なりとも明らかにできた点で、研究の今後の発展が期待される。さらに、安史の乱後のソグド系突厥の移住と藩鎮の関係を実証的に明らかにした部分は、後段の沙陀政権の出現の前提として、時代を繋ぐ考察として有意義である。

また、唐朝と藩鎮の関係が一貫した対立構図ではなく、具体的事案については「共存」関係にあったことを政治・軍事の両面から明らかにした。このことは、一面的理解に終始するこれまでの研究への警鐘ともなっている。

これらの成果からみて、著者が試みた北方系諸族の動向を分析するという外からの分析視点は有効であり、本論文では成功したといえる。それを可能にしたのは、近年ようやく公刊された墓誌銘を含む石刻史料の利用であり、本論文は石刻史料を本格的に利用したはじめての研究という先駆性をももっている。

ただ、石刻史料が、墓誌という政治的社会的に有力者に係わる特殊史料であり、編纂史料にはない重要な情報を得ることは本論文において十分示されているが、今後、北方系諸族による政治軍事的活動の実態、生活や意識のあり方とその変遷といった問題などについて、新たな史料や方法を開拓し、解明する必要がある。

本論文は、従来の研究が抱える史料上の制約を石刻史料を利用することで補強するとともに、北方系諸族と藩鎮の関係という視点を導入することで唐代政治軍事史を見直すものとして十分に独創性があり、学界への貢献が大であると認められる。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。